



4. 全国から群馬に集う仲間へ、 小野会長・中川大会会長として 一番伝えたい“メッセージ”は何ですか？

小野会長 この国は世界最古の王朝で、初代神武天皇が即位して以来、2025年で2685年目です。“世界最古の王朝”ということが、間違いなくこの国の長所だと思うんです。バトンが途切れることなく手渡されていくということ。それは1人では成し得ない本質論です。私は、そこにYEGも然りですが、この国の本質が集約されていると思うのです。

我々は経済人ですが、100年続く企業は世界の総数の中で50パーセントを超える。200年続く企業も70パーセントを超える。逆に、日本の企業で10年存続率は6.3パーセントしかない。全体の1割にも満たないので。経営者も役人も政治家も、地域や企業が「明日無くなてもいい」なんていう人はおそらくいません。1年後も、できれば3年後も、お客様に喜んでいただき、そのご縁をつないで、従業員のサラリーを増やし、経営の範囲を広げながら継続していくれば、経営者として幸せだと思います。地域でいうと自分の故郷、大きくいえば国、豊かな暮らしや社会が継続していくほしい。幸せの価値観というものは時代によって変化、変容していくますが、子や孫の世代まで続いてほしいというのが人間の本懐だと思うんですよ。

けれど今、戦後80年。この国の政治も含めて、ある程度その経済的予見も人口減少とともに出てきています。そうなったときに、“永続”という2文字、中心点というものが、国もこの商工会議所も明白ではない。観光客数をどのくらいに設定するか、売上をどれだけ上げるか、経済発展をどのくらいにするか。そんなものは手法手段の一つに過ぎません。上位概念が明白になっていないのに、一つの事業だけで話しても価値観が違うから本質からずれていく。そして、資本主義の原理に飲み込まれていくんです。

それなら、青年経済人のリーダーである我々が、明確に

3. “ハイパーローカル”という挑戦を掲げる群馬大会。その先に、中川大会会長はどんな未来を描いていますか？

中川大会会長 “ハイパーローカル”という言葉は、実は私が掲げたというよりは、自然発生的にメンバーの中から出てきた言葉です。私としてもすごくしっくりきた言葉で、キャッチャーな表現でもあるので使わせていただいている。やはり第1回大会から全国をほぼ一巡して2周目に入る節目の大会を考えると、今後この全国大会というコンベンションは、ブロック大会しかり、必然的にキャピタルではない土地での開催が多くなってきます。そうしたときに人口が少ないからとか、マンパワーが足りないからという理由で、後ろ向きのマインドになるのは避けたいと思います。この全国大会、今作っている途中ですけれど、地元愛とYEGメンバーとしての矜持とユーモアを含めた個性、それらを掛け合わせればどんな形であれできないことはない、と実感しています。今後、このコンベンションを担う地域の方々や、手を挙げるチャンスがある人たちには、ぜひ前向きに向き合ってもらいたいなと思いますし、すごく大きなチャンスもあります。つないでくれた人たちへの感謝ももちろんあります。規模はずっと右肩上がりで拡大し、10,000人規模のコンベンションへと成長してきた中、時代の変化により環境の厳しさはありますが、そこに立ち向かうマインドを持って全国大会に臨んでもらえるようなムードメント、機運の醸成を図れる群馬大会にしていきたいと思っています。会場も収容人数はかなり少ない。けれども、いろんな工夫をして参加者の皆様に快適な時間を提供し、参加して良かったという気持ちを持っていただければ、それが“ハイパーローカル”。中心都市でなくても情報都市、この消滅可能性自治体というような話が出る地域であっても、工夫と努力と愛情を持って臨めば成果を上げられるということを体現して、皆さんにお示ししたいと思います。

